
若者は英雄になれるか?

必殺ファンの一人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

若者は英雄になれるか？

【NNコード】

N6248Z

【作者名】

必殺ファンの一人

【あらすじ】

別世界の風都にて切り札を授かりし少年”左門章太郎”しかし、その男に取つて……鬪いは己の退屈を満たす為でしか無い。彼は英雄になれるのか？

FILE 1 仮面舞踏会（前書き）

もう一つの方も亀更新ですが、両方とも進めて行きたいと思います。

FILE1 仮面舞踏会

FILE1 仮面舞踏会

左門章太郎……私がお前が行くべき明日を与える
「行き成り何だ……あんた?」

風の街”風都”此れから先の未来、数多くの都市伝説が生まれる”
エコ”の街。

この街に住む人々、他の県からの人々にも愛されるこの街にも
”闇”はある……とても17歳には見えない体格を持つ青年”左門
章太郎”は、

人生の岐路とも言える瞬間に遭遇した事に、戸惑いを覚えていた

私はシユラウド……貴方を地獄に誘いに来た
「地獄、か……本当だろうな?」
その為の道具が……これ

全身を黒ずくめの服に包み、顔をサングラスと包帯で覆った長髪の
女”シユラウド”

シユラウドが放つた、右側がスロット状の挿入口となつて立
つ形状をした赤い大型の機械が
章太郎の腹に触れた瞬間、機械の両サイドから銀色の金属帯が飛び
出し、章太郎の腰に巻きつく。

「ベルト……?」
そして……このメモリを

次に放られたのは、全長10cm程の黒いUSBメモリ、Jと大きく刻まれた左下には「」と書かれていた。

「……”JOKER”」

そして……ただ一つ存在するスイッチを押した。

『JOKER!-!』

後は……

やけに力の籠つた電子音声、

続けてシュラウドが説明を続けようとすると、それを章太郎が手で制す。

「もう良い……大体分かった、こうだろ?」

ベルトヘメモリを挿入、そのまま挿入口を左手で倒した次の瞬間。

『JOKER!-!』

またも鳴った電子音声が鳴り響き、章太郎の周囲に発生した多数の黒い金属片が

章太郎の全身を包み込み、既に人間の物では無い両眼が紫のオーラを放つ時、“変身”が完了する。

W字型の角、特徴的な赤い眼、黒一色のボディを彩る濃い紫色の意匠のラインが両肩や両胸に奔り、

両足の紫色のアンクレット、両手首の紫のブレスが電灯の光に当てられて妖しく光る

「これは……」

ジョーカー……貴方に与えた姿の名前

「JOKER……切り札か、中々洒落ている」

そう皮肉めいた一瞬、JOKERがシユラウドから視線を外した瞬間、

銃声が響く……強化された聴覚からいち早く反応したJOKERは右への側転で避ける。

が、シユラウドの事を気にかけていなかった

JOKER

慌てて振り返

「！？ お、い い、ない？」

其処にシユラウドは居なかつた、まるで最初から居なかつた様に

唖然とするJOKERの背中に叩き付けられるのは “更なる銃撃”

「う ちつ……」

JOKERは自分を襲撃した相手を見る事なく、力強く駆けだした。弾丸による痛みは……其れほど無い、今の自分の皮膚は弾丸すら通さない程に

頑丈且つしなやかだと言つ事が分かつた、今さらだがシユラウドが何故この姿に成る為の

装備一式を自身に託したのか分からぬ章太郎……精々解るのは今

の姿の名称、

そして……自分の身体能力が”格段に上昇した事ぐらいだ”

今も続けられる銃撃、足音からして相手は3人……その内の一人が手にするのは恐らく”機関銃”

もう一人は携帯電話……思考しつつ走るJOKERの前方に壁が見える。

どうやら、ビルが重なる路地裏に迷い込んだらしい、常人ならば此処で立ち止まる。

追跡者がその認識を持つてゐる事を、JOKERは願つた。

「 はつ！！」

勢いに乗つて……跳躍、明らかに人間一人の力で跳べる距離では無い。

経験もした事の無い高さにJOKERは戸惑つ事なく”壁を蹴る”約10m程の高さの壁を蹴つたJOKERの体は機関銃の銃撃に晒されながらも真っすぐ襲撃者に向かっていく

うろたえる黒い礼服を着た黒い頭部にムカデの如き骨が顔に張り付いた存在。

そんな名前も訳も解らぬ存在に対して、JOKERは

「おらあつ！！」
「ぐあ！？」

容赦なく蹴り飛ばした。 着地したJOKERに向けられる銃口

”銃身”が力タカタ震えている。

引き金が引かれる前に、JOKERは機関銃を回し蹴りで蹴り飛ばす。

「おのれ！」
「やつ！」

ほんの……2 3秒だらつか？ 殴りかかつたきた一体の腕を掴み引っ張り、

ガラ空きの顔に裏拳、裏拳の反動を殺さず、遅れて殴りかかる一体

を蹴り飛ばす。

JOKERは抱く……”弱い” 章太郎自身、学校にも通わず喧嘩喧嘩の毎日を送り、その日々に飽きてきた事から”シユラウド”の誘いに乗った。だが……現状拍子抜けだ。

「此れが地獄か？ 温過ぎるぜ……ふつ……」

「つ！？」

「うあつ……」

背後から足音を殺し、殴りかかろうとした一体にJOKERは容赦なく、背面蹴りを叩き込んだ。

「うう……」

「どうした、掛かつてこないのか？」

最初に蹴り飛ばした一体が、弱弱しくファイティングポーズを取っている。

だが足が出ない、腰から下が震えているからだ。

そんな様子を見かねて、JOKERは

「ふん」

「！？」

張り手で相手を突き飛ばす、体勢は……無論崩れている。

JOKERは容赦なく、全力の蹴りを叩き込んだ。

「うわああー！」

防ぐ間も無く相手は蹴り飛ばされた。

その手から黒の携帯電話が離れ、コンクリートの地面に擦れながら落ちた。

「…………ふうううう」

深く息を吐き、前へ歩き出すJOKER、一歩一歩歩いて……”電話を踏み碎いた”

『…………MASQUERADE…………』

「…………あん?」

瞬間、JOKERの後方から多数の電子音が響く、数は……10か20程、しかもたつた今やり合っていた3体と同じ姿だ。

指揮官だろうか……2歩3歩と前進し、JOKERを指差す。

「我々の邪魔をするとは良い度胸をしている、だが、其れもこれまでだ!!」

「少しばかりなりそつだな」

思わず……仮面の中でニヤリとする章太郎、左手をだらりと上げ……2回手首をスナップさせた。

相手方に取つて其の行為は、戦闘開始には充分過ぎる合図だった。

「はああああっ……」
「たああああっ……！」
「しゃあ……行くぜ」

最初に駆けだしたのは2体、その後に続いて残りの十数体がぞろぞ

ると其々タイミングをずらしてジグザグに走り出す。JOKERは小細工なしに向かえ打つ！！

「は、うらあ……たつ！ はあ、らああ……やあああつ……」

近い相手を殴り、殴り、殴り、殴る。

一瞬たりとも恐れず相手を殴り倒す様はまるで嵐

暴風の如き男の前に……異形の男達は為す術が無い。

「うう……おの、れつ

」

「おいおい……この程度かよ、弱すぎるぜ」

倒れ伏す男達に対し、JOKER 左門章太郎は腕を組み退屈そうに首を鳴らす。

いや、そつにではなく……実際退屈だった。変身当初には恐怖もあつたが……

銃弾が効かないのであれば後はいつも通り……やるかやられるかの土俵での喧嘩だ。

修羅場と言つ意味では男達に部があるだろうが、いついつ条件で章太郎は負ける気がしない

その事が更に退屈に拍車を掛ける 何時の間にか倒れ伏していた男達が逃げ出している。

「その姿……覚えたぞ！！」

「お、おい……！」

思わず手を出したJOKERに順番的に最後に逃げだした異形の男は見向きもせず逃げ去る。

「 ふんっ」

乱暴にメモリ挿入口、スロットを引き上げJOKERメモリを引き抜くJOKER。

風の音と共にJOKERの皮膚が黒い金属片と崩れ落ち、人間”左門章太郎”の姿が現れる。

昔ながらのバンカラスタイル……彼を一言で表すなら此れだろう。鍔の長い学棒、無地の白Tシャツを覆う丈の長い学ラン、少々だぼついたズボンに、鉄ゲタ、加えて人懐っこいとは無縁な強面の顔……一般的に見ても充分”時代遅れ”的”のファッショントリックをした不良と言えるだろう。

「ちつ……つまらねえぜ」

章太郎はメモリとバックルを学ランのポケットに突っ込み夜の風都へと繰り出す。イラつきと退屈を解消する相手を探す為に……それならたとえ警官であろうとも構わなかつた。

「（どつかにいねえのかよ……俺が井の中の蛙だつて思い知られてくれる奴は）」

何かを守る……何かを救う……戦士として最も優先すべき心が章太郎には乏しい。

ただ自らの欲を満たしたいが為の荒々しい風。

それがドーパントと呼ばれる怪物と変わらぬ事と、今の章太郎は気づく術がない。

FILE 1 仮面舞踏会（後書き）

ドーパント募集の方は後4～5話進めてから募集を開始しようと思います。

FILE2 暴力（前書き）

う～む、ちゃんとハードボイルド、と言つかシリアス出来るか不安です。

暴力……其は生きるものなら誰もが持つ力。

そして……いとも簡単に出来ることが出来、傷つける力もある。

暴力は姿形を変えて、存在する、星に生きる命の数だけ存在するのだ。

腕力、言葉、嘘……やられた数だけ体が傷つき、やられた数だけ心が傷つく。

度をすぎれば……心が死に、体も死ぬ。力には見極めが必要だ、抑えることが必要だ。

其れが出来なければ……欲望に流行る野獸と変わらない

左門章太郎を始めとする大勢の人間が暮らす風の街”風都”は都市伝説が多い。

”骸骨男” ”死人帰り” ”百足男” ”蜘蛛女” ”ゴキスター” 上げれば切りが無いが、

市民にも信じられていない都市伝説ばかりで信憑性も無い。人々は自らが形成する日々を過ごすだけだ。

一瞬、長閑だとか……平和ボケとも言えない事はない風都にも人々を脅かす止みはある。

今現在最も世間を騒がしているのは……14歳から18歳までの学生達を狙つた”連続殺人事件”

未遂も含めれば実に30件もの犯行が起きている、少なからず……死人も出ている。

その数は実に4件にも上る……4件とも、逃げ道を失つた後に、原

形も残されず”潰された”

警察の捜査は当初難航するかと思いきや被害者たちの共通点は実に簡単なものだつた。

死亡者4人被害者37人の共通点は風都市内A中学校のクラスメイトと言ひつてある。

担任教師を含めた総勢41人の平凡なクラス、特に突出して良い所がある訳でもない、どこの学校にもある様な平凡なクラスだつた。世間体に引っかかる様な悪い噂も見つからない。

最初はクラス内の誰かの犯行かと思われたが、最後の被害者が現れた事でその線は消え去り、

学校全体、周辺地域に的を絞り必死に捜査を続けた風都警察であつたが容疑者どころか目撃者すら

上がらない……そして、時が経つにつれ、風都市民の恐怖も薄れ、事件は段々と忘れ去られていた。

風都警察の力も及ばず事件は……”解決した” いつ言ひた形で。

ある日の晩、左門章太郎は何時もの服装で街へと繰り出していた。特に何を目的、と言う事では無い……ただ休日で学校が無いからと言つぐらうである。

プラプラと近場の公園に赴き、ベンチに腰かけ、空を見上げる。

ガイアメモリ、ロストドライバーを受け取つてから3日後、

章太郎の自宅にDVD付きの封書が届いた。差出人の名前は書かれていなかつたが、

どうせシュラウドだと気にしなかつた。手紙の内容はガイアメモリ、ドーパントについて全般、

ジョーカーメモリの特性、ロストドライバーの役割など多岐に渡り、DVDの内容は実験場と思われる場所でのドーコンの性能テストだった。

幾つもの怪物の中には初陣の相手マスカレイド・ドーコンの姿もあつた。

「…………」

コンビニで買つてきたスポーツドリンクで喉を潤し、新聞を読み流しつつ、時間を潰す。
時、身体を解す準備運動を挟みつつ公園で過ごしていくと……あつという間に暗くなり、遊んでいた子供達や、話しに華を咲かしていた奥さん達も帰つて行つた。

「…………」

今日は何故だか帰る気分ではなかつた……この公園に居続ければ、何かが起つる。

そんな予感が章太郎にはあつた、だから待つ。ベンチにどっしど座り、ただ待つ。

時刻は未成年が確実に家に帰つている時、既に数時間以上公園で過ごしている章太郎に

赤、青、黄、緑、ピンク色のただでさえ派手なジャンバーに龍やら虎やらの刺繡が入つた

如何にも不良らしい格好をした同年代の少年達が近づいてくる。その中でリーダー格らしい

赤色のジャンバーを着た少年が軽い感じで話しかけてきた。

「なあ、お兄さん、ちょっと話があるんだけど……聞いてくれるよ

ね？」

「ない、とつとと帰れ」

即答した章太郎に赤色ジャンバーの少年は眉をひくつかせるが、青色の長身金髪の少年に宥められる。

章太郎の座るベンチを囲む様に立つ、5人に対し、章太郎は苦々しく思うも表情には出ていない。

そんな章太郎の態度に腹を立てず、後ろに回り込んだピンク色のジヤンバーを着た少女がわざとらしく章太郎に抱きつき、耳元で囁き始めた。

「良いじやない、少しくらい話を聞いてくれてもさ」

「お前達の様な青臭いガキに構っている暇は俺には無い、とつとと帰れ」

「もう、い・け・ずうう」

章太郎の頬に人差し指、押しかて楽しそうに笑う少女、……だが、突然その表情が凍りついた。

コートのポケットに伸ばした手を掴まれた事によって。

「ちょ、な、何……？」

「金を狙うなら、他のにするんだな」「

自分達の不味い犯行がばれた事によって、周りの少年達が章太郎を抑え込み、

集団暴行に入ろうとするが……”相手が悪い”誰よりも早く行動した黄色のジヤンバーの少年は

座つたままの章太郎に顎を蹴られ、緑、青色のジヤンバーの少年はストレートパンチ、肘打ちの

素早い繋ぎにより鼻血を流す鼻を押さえ後ずさる。赤色は……恐

怖で足を止められた。

「あ、が……」

「いっ、てえええ」

「うう……ちくしょお」

其々殴られ蹴られた場所を抑え、痛がる彼らを冷めた目で見つめながら、

章太郎は傍で震えるピンク色ジャンバーの手を離し、今まで買った物を突っ込んだ

ビニール袋を持って立ち上がる。彼らの存在など無かつたかのように出口へ向かい歩き出した。

「ち、すかしてんじやねえええええつーー！」

「け、謙二！ やめようよーー！」

怒りで己を突き動かした赤色ジャンバーの少年に対して、少女が慌てて叫ぶ。

「……はあ

面倒な事をさつさと終わらせるに限ると、章太郎は背後から駆けてくる赤色ジャンバーの少年、

”謙二”を蹴り飛ばし、とつとと自宅へ帰ろうと素早く行動に移るうと……”したのだ”

「……？」

しかし、一瞬……時間が制止したかの様な、静寂した空間に章太郎の足が止まる。

何事かと、ゆっくり後ろへ振り向く章太郎……其処には

「け、謙一!……!？」

頭部の無い……つい数秒前までは、”生きていた人間”が、首から血を噴き出し仰向けに倒れた。

まだ生温い赤い血が、少女に降りかかる。さしもの章太郎もその光景には呆然としている。

が、近くのゴミ箱に勢いよく何かが落ちた事で生じた大きな音に意識を戻された。

「謙一!……!」

「……つ!…」

すると同時に、自分へと向かい突っ込んでくる巨体の突撃をかわす。本能……意識の外の事だが、既にロストドライバーを腰に巻いていた。

「謙一、謙一!……いや、いやあああつ!…」

「お、おい。は、は、は、は早く逃げよう!……逃げるんだよ!」

「！」

「急げつて!……此処に居たらみんな死んじまつ!…」

「真奈美……ごめん!…」

章太郎がチラリと視線を後ろの少年達に移すと、3人の少年が一致団結して正気を失っている少女を

抱えて、迅速に走り去つて行つた。あの速さは中々真似出来る物では無いと章太郎は思うも、

目前に迫つた脅威を前に何時までも余所見をしている訳には行かなかつた。

「ウアアアアアアツ！」

「ちつ！」

黒く、恐ろしい迫力を持つ丸い拳の大ぶりフックをしゃがむ事でかわす章太郎、頭上に感じる暴風の様な風切り音に一瞬冷や汗を搔きながらも、反撃に転じる。

「ら、はあっ！…たあっ！…」

今だ相手　　”ドーパント”の全体像は掴めていないが、鳩尾部分に見える鉄の様な黒い球体は避け、灰色の分厚い腹筋に向けて、ワンツースリー・リズムのストレートパンチを繰り出す章太郎、だが

「（かてえ　　！？）」

「ウアアツ！…」

「くつ

」

あまりの硬さに、逆に拳を痛めてしまった……胴体の太さ、上半身の異常なまでの筋肉量を見て、

一撃でも喰らうのは危険と判断した章太郎は嵐の如く迫るドーパントに対し、避ける事を続けた。バックステップ、ダッキング、隙をついての潜り込み……だがこのままで埒があかない。

咄嗟の判断で持っていたビニール袋をドーパントに投げつける章太郎、無論ダメージなど期待していない。懐からメモリを取り出し

「ウガアアアアツー！」　『JOKER！』

「　　つー！」

相手はビール袋に構う事なく章太郎に突っ込んでくる。メモリを起動し、即座にスロットに放り込んだ章太郎は大振りの攻撃の隙を逃さず、

飛び込み前転でかわし、右手でスロットを倒した。

『JOKER！』

「ウウウウウ、アアアアアツー！」

「ふつ！　あああああああつー！」

JOKERメモリのガイアウイスペーが発せられ、変身が始まる。だが、ドーパントにそんな事は関係ない、変身途中の章太郎に問答無用で肉弾戦を仕掛けてくる。

章太郎は振り向きざまに全力のダッキングストレートでパンチを避けつつ、攻撃を加える。

一発、二発、三発、可能な限りの拳を叩き込み

「らああああつー！」

「　　ウウー！」

「はあつー！」

渾身の右前蹴りでドーパントを蹴り飛ばすと同時にJOKERへの変身が完了した。

よろけ、後ずさるドーパントに対し、ジャンプからの打ち下ろしパンチを決めるJOKER、

攻め手を緩めず、殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る。体格差、筋肉稜の違いからパワー、タフネスの差は

明確な為だ、相手に本氣を出せずに倒す、そんなやり方は……得意だった。

「おらあつー！」
「ガアアツー？」

前蹴りから飛び蹴りへの繋ぎで、ドーパントは後ずさる。 大柄な体格が証明している通り体重もかなりの様でJOKERのマシンガンの如き連續打撃も期待していた程の効果は為していない様だった。

「ウガアアアアアア、アアアアアアアアツー！」
「ふんっ」

雄叫びを上げ、バカの一つ覚えの様に突っ込み、闇雲に拳を繰り出してくるドーパントに
敢えて答えるJOKER、圧倒的なパワーの差を覆す為には
「（当たる前に……当たりやあ良い！）」
「ウアアアツー！」

それだけだった、無論全て成功している訳ではない……全てのパンチにカウンターを合わせる等、
よほどの実力差がなければ無理な話だ、歯を食いしばり揺らぎそうになる意識を繋ぎとめるJOKER、
拳を振るう、全力を込めて、耐える、此処で倒れる程の器で在りた
くないから

「ずありやあつー！」
「ガアアツー！」

パワーとテクニック……全く違うアプローチで展開された乱打戦は、終わりを告げられる。

両者互角いや、僅かながらJOKEERが優勢だった展開が、ひっくり返った。

「ゴフシ」

ドーパントの左腕……鉄球上の拳によるカウンターボディブローがJOKERの身体を九の字に曲げる。

予想以上の破壊力ではあるが、何とか距り張り攻撃を繰り出そうとするJOKERの右目に

「ウアアアッ！！」

もう一撃、強烈な左アッパーが加えられ、体勢が上がった所を左ストレートを腹部に喰らう。

何回転転がり回る事で止まつた。

勝負を決める事にした
”

「ウガアアアアアアアアアアアアアアアアツー！」

咆哮にも似た雄叫びを上げ、自身の肉体を左腕だけ残し、ボール状に変化させるドーパント。

トーハントは左腕で地面を殴り邊まじい邊で土煙で見えないところへ移動していく。

JOKERの対処は……たつた一つ。

『JOKER!! MAXIMUM DRIVE!!』

「うあありやああつ！！」

紫の炎を纏いし拳が、ボール状のドーパントを殴り飛ばす、突然のカウンター・パンチにドーパントで空中で変形が解け、“もう一度同じ音声が鳴った”

『JOKER!! MAXIMUM DRIVE!!』

「ガ、アアツ！？」

殴られた場所から煙が上がり、其れ相応のダメージを受けたドーパントが目にしたものは。

「はああああつ！！」

己に終わりを齎す……紫の炎だった。

「ちつ」

JOKERのMAXIMUM、蹴りバージョンを決めた章太郎は足

元を払い……舌打ちする。

まだ使って一回しか経っていないが……JOKERでは肝心な時のパワーが足りないのだ。

だからこそ一連続MAXIMUMに頼らざる負えなくなる。章太郎に取つて非常に悔しい事だが

「（MAXIMUMで倒さなければならぬとは言え、……このザマカ）」

体内からメモリが排出され、地に倒れ伏す中年の男の姿を見て歯軋りが抑えきれぬ章太郎。

乱暴にドライバーからメモリを引き抜き、近くに落ちていた、先程投げたビニール袋に

中身を回収しつつ、公園から立ち去る。ドーパントの男が生きている事は直ぐに分かったからである。

その翌日 学校へ登校する為、通学路を歩く章太郎の手元に新聞がある。

章太郎が特に惹かれているのは……トップの見出しだ。

『中学生連続殺人事件容疑者逮捕！』『デカデカと書かれている。一応確認してみれば、間違いなく『VIOLENCE』のメモリを使用していた中年の男だった。

犯行の理由に関しては書かれていないが、

其れは名誉挽回に張り切る警察が徐々に明らかにしていく事だろう。丁度あるゴミ箱に新聞紙を丸めて捨て、マイペースに登校する章太

郎だった。

この街に……ヒーローが現れるのは、何時の事であろうか?
風都の風は……ただ流れるだけ

FILE2 暴力（後書き）

突然ですが。

別の作品、書いてる時も思つていましたが……他作品とのコラボ、やつてみたいですね。こつ言つのつて待つてる方が良いんでしょうか？

其れとも自分から申し込みに行つた方が良いんでしょうか？

感想も含めて、コラボのアドバイスもお待ちしています。

其れでは、失礼いたします。

FILE 3 飛蝗（前書き）

何とか、年内に書き終える事が出来ました。
では、御拝見お願いします。

借金……その名の通り、自身が持つ金銭を相手に貸す、と言つ意味である。

この借金にも色々な形がある。未成年どうしが行つ口約束程度の貸し借り、

店を持つ者が将来の栄光を勝ち取る為の融資など成功すれば、まだ、良い……その者に待つてるのは眩い光だけなのだから、
だが……失敗した者を待つのは

左門章太郎を始めとする多くの人々が日々を過ごす風の街、風都では、最近こんな事が起きている。

”借金を苦にしての自殺” ”家庭崩壊” この二つの発生確率が今月に入つて急増しているのだ。

詳細な理由などはまだどのメディアにも明らかにされていないが流石に32件も起これば誰しもが不安に思う、疑いもする……左門章太郎もその一人だ。

「…………」

腹筋台に足を掛け、腹筋運動を続ける章太郎……12畳ほどの部屋には、腹筋台の他に
サンドバッグ、プレスベンチ、エアロバイクなどのトレーニング器具などがあり、

部屋の隅っこには少し古い機種のラジカセが少し大きな音量で働いている。

内容は……『ニュース番組の様だ、

「…………」

『続いては、最近風都で多発している闇金問題についてです。』

腹筋運動から背筋運動に切り替え、番組の内容に聞き入る章太郎。どうやらメインキャスターがその筋のお偉い先生達に質問をしつつ進めて行く、

だが、問題についての基礎知識や対処法ばかりで被害者については何も言及されていない。

「…………」

『では、続いての「一ナード」に』

ため息一つ……筋力トレーニングを続ける章太郎、正直に言えば覚えきれない、成績が中の下の男が小難しい事を数分で理解すると言つ事が無理な話だった。

明確な情報を得る事が出来なければ動くに動けない……15分ほどの休憩時間を取りた。

「…………」

プレスベンチに座り、携帯を弄る章太郎……画面はインターネットの検索画面から、

ある項目をクリックし、ブログをやっている個人サイトを開く。

『ウオッチャンの〜探し！ ビューティーレディ、ウインド』

「…………」

ふざけた内容だが、仕方が無いと、表示されていないある項目を5回クリックする章太郎。
すると、画面が真っ暗な画面に切り替わり、少しすると中央にpasswordと表示される。

＊＊＊
『.....fast clear, second next』

「相変わらず、面倒だぜ」

章太郎が舌打ちするのもある意味、無理は無い、このパスワードは1～5ステージまであり、それぞれのステージで違う32ケタのパスワードを入力しなければならない。

しかも……一度でも間違えれば五日間はこの個人サイトには入れないと言う、面倒な設定

少々指が疲れた頃……章太郎がようやくパスワードの入力を終えると、今度は全く違う画面が出てきた。

ハン・ネー

アドレス

な・い・よ・う?

期限は何時まで？

依頼料・幾ら？ いくら？ e k u r a a ?

送信してええくううれええつ

内容を全て埋め、相手に送信し終えた章太郎は、携帯電話をプレスベンチに置き
サンドバッグを叩き始める。この個人サイト、表向きはブログを
主にしているが

裏では内容通りの情報を仕入れてくる情報屋の依頼サイトなのだ。
たとえ半日であろうと、金さえ払えば詳細な情報を仕入れて来る為、
章太郎もよく利用している。

何にしても……全ては明日、得られた情報の元、行動するだけだ。

「 らあつー！」

轟音鳴らし、吹つ飛ぶサンドバッグ……明日の行方は、誰にも解らない。

「……此処か」

翌日早朝、依頼料を入っている指定された郵便番号を記した封書をポストへ入れた

章太郎はウインドヒルズと言う8階建てのマンションの前まで来ていた。

昨日、章太郎が依頼した情報サイトが仕入れた情報が此処を指していたからだ。

しかし 章太郎が必要としていた情報とは……少し違つていた。

「（闇金問題を起こす犯人の情報は延長……変わりに手に入ったのが）」

ポケットから握り締めた物を取り出し、見つめる章太郎、其れは……情報屋が指定した一室の鍵。

指定された電話ボックスに張り付けられていたこの鍵が、何かに繋がる

そう……直感が告げている。当初要望していた情報の代わりに送られてきたのが。

「（“此処に来れば……怪物が来る、か。ガセかどうかは”）」

行つてみれば解る……今時珍しくオートロックが無いマンションのエレベーターに入る章太郎、

目的地は最上階である8階の801号室……元は美容師と実力派俳

優の夫婦が暮らしていたが、

此処最近の借金問題の波に呑まれ、夫婦揃つて飛び降り自殺している。

夫婦の部屋は既に警察が調べ終えた後で、今後戻つてくる事は考えにくいか、

念の為に章太郎は革手袋をしている。 エレベーターが止まつた。

「…………」

801号室はエレベーターを出て、左に真っ直ぐ歩いて行つた場所にあつた。

様は隅つこの部屋だが……ともかく、部屋の前に立ちドアノブに鍵を差し込む章太郎、

鍵は問題なく開けられた。 鍵を外し、ドアを開け、中へ入る。

「流石に、片付けられてはいなか

中に入ると、静寂とした空間が章太郎を出迎える。

夫婦が死んだのは一週間前……まだ家財の整理も行われていなかつた。

鉄ゲタのまま、上がり込む章太郎……少し歩いた先にはまだ人が居た感じが残るリビング。

二人用のテーブルなのだろう、可愛らしく着飾つた二つのイス、此処で仲良く暖かい食事や

他愛のない会話を楽しんでいたのだろう、特に何を発する訳でもなく、イスの一つに座る。

「…………」

腕を組み、イスに背中を預ける章太郎……もちろん考へる事は一つ。

”此れから来るであるうつ怪物について” 美容師と実力派俳優の部屋に……何故来る？

目的は何だ？

いくら考えた所で、スキルも情報も無い章太郎に解る筈がない。解らなければ動くしかない……章太郎は立ち上がり、夫婦の部屋であろう部屋に入る。

「 くだらん趣味だ。」

其処には……所詮オタク趣味と言われる数々の物がある。 フィギュアやゲーム機……壁一面を覆う美少女キャラクター達のポスター、 ほとんど章太郎に馴染みの無い物ばかりだ。しかし……調べなれば始まらない、 と、まずは壁一面のポスター群から調べる章太郎。すると妙な個所を見つけた。

「……どうなるか、だな」

壁一面を覆うポスター、しかし……たつた一か所だけ、指一本分の大きさだが、 元の壁の部分が覆い切れていない。試しに押してみると
押せた。”

すると、直ぐ傍のポスターと思われた物が開き始める。 其処には

「 ガイア、メモリ……！？」

隠し金庫と思われる場所に隠されていたのは宝箱、その箱を開いた章太郎は

少なからず驚愕を覚える。中には3本のガイアメモリが保管されていたからだ。

しかも、その内の一本は……JOKERと同形状のメモリだ。

「残りの一本は破壊 !？」

同形状のメモリは回収し、残りの一本を破壊しようとする章太郎、だが 身の危険を感じ、迅速にベッドへ飛び込む。今度は

「随分とカラフルな飛蝗だな……！」

「！」

飛蝗のドーパント、ホツパードーパントと言ったところだろうが、ホツパードーパントの動作の一端を見た瞬間、章太郎は飛び込み前転で、空いているドアへ逃げ込む、途端、部屋の壁が豪快に蹴り抜かれている。

逃げ込む先は、リビング……しかし、追い付かれた！？

「 フツ」

「ちつ！？」

テーブルの上を転がり、ホツパーの上段蹴りを避ける章太郎、だがホツパーは上段からのかかと下ろしで迫る。章太郎は床へ着地した瞬間

テーブルの両足を掴み、持ち上げるとテーブルの中心が蹴り抜けられた。

蹴り抜けたテーブルをねじり倒そうとするとホツパーは抜けぬ足を蹴りあげ、

足を抜き、落とした瞬間、逆の足で章太郎へ蹴り込む。

右へ側転する事でかわす章太郎、その腰には……ロストドライバーが巻かれている。

「クアツ！！」

「　　くつ」

しかし状況は変わらず不利……ホッパードーパントの怒涛かつ巧みな足さばきをどうにかわしていく章太郎だが……遂にベランダまで追い詰められた。

「オワリネ……ボウヤ」

「ふつ　　どうかな？」『JOKER!!』

「！？　ソレデモオワリヨ」

「がつ……！」

切り札であるJOKERのスイッチを押し、スロットへ叩き込む章太郎、

一瞬動搖を見せるホッパードーパントだったが、冷静かつ迅速に章太郎へ全力のハイキックを叩き込む。左腕でガードする章太郎だが……ホッパードーパントの脚力を前にしてはさしもの彼も耐えきれない、ベランダのドアガラスを突き破り……落下する。

「ち、い……」

背中を強く打ち、左腕を骨折した章太郎……彼の体重は80超え……重力が働き、コンクリートの地面へ真っ逆さま、助かるには

「行くぜ……！」『JOKER!!』

変身するしかない……スロットを倒し、章太郎は変身する。変身が完了するまえに……ホッパーの追撃！！

「ハアアアアツ！！」

「 りあああつ！！」

「 ツ！？」

ホッパーードーパントの飛び蹴りをJOKERは迎え撃つ、両足を揃え微かに動かし、飛び蹴りの着弾点をずらしたのだ……そして、蹴り落とす。先にホッパーが”ワゴン車”に激突しJOKERが着地する。

「ちつ 駐車場か」

JOKERとホッパーの落下地点は……ウインドビルズ住人専用の駐車場だった。

しかし、不味かつた……変身のおかげか痛みは和らいでいるが、左腕がまともに動かない。

どう戦うか？ 踏み切れないでいるJOKERに……ホッパーが迫る。

「シャアツ！！」

「つ！ おらあつ！！」

完璧に奇襲のタイミングだつた飛び蹴りをサイドステップでかわし、続き背面蹴りを無事な右で殴り返し、隙だらけな背中を蹴り飛ばす。15m離れたセダンのフロンドガラスに激突し、倒れ込むホッパー、しかし体力は有り余つている様で直ぐに立ち上がり、飛び上がる。

「（やれやれ、この距離が苦じゃねえか。）」

ぐんぐん迫るホッパー……如何に変身した状態と言えど、相手のペースに嵌り、

あの驚異的なキックを喰らい続けければ負ける。ならば

「シャー！？」

「はあ！？」

ホッパーの上空回し蹴りを、ギリギリまで引き寄せ、首を僅かに逸らす事でかわす」JOKERは威力の無い脛を掴み、力任せに叩きつける。

倒れ込むホッパードーパントをすかさず……！

「あ、らあああっ！？」

サッカー ボールの如く、蹴り込んだ。5m先の軽トラックの荷台に転がり込む

ホッパー、流石にダメージは受けている様子、しかし

「ちようどいい、ハンデだぜ」

「ワタシワ……ナメルナ！？」

JOKERの言葉に憤慨したホッパーは再び、跳躍、先程と同じ対処方法を取ろうとした、JOKERだが、其れが間違いだと気付けない。

「ぐふつ」

「シャ、シャアツ！？」

先程とは速度も違う回し蹴り、頬を蹴られ、後ずさるJOKERにホツパーは透かさず蹴り込む。

上段、中段、下段、回し、下ろし、上げる。払われても避けられても止まらない……

何時しか、JOKERの手を超えて、その身体に叩き込まれるキック、キック、キック。

「シャアアッ！…」

「ぐあっ！…」

右肩に叩き込まれたキックにJOKERは耐えきれず、蹴り飛ばされ、車を超えて……緑色の金網フェンスに激突する

「ち、ふう……まだまだ、だぜ」

そつと音つて……スロットからJOKERメモリを引き抜く章太郎ベルトの右脇にあるマキシマムスロットへ叩き込んだ瞬間、ホツパーが迫る。

『JOKER!! MAXIMUM DRIVE!!』

「オワリネ、ボウヤアアアッ！…」

「すううううつ らあつ！…」

「ナアッ！…」

ホツパードーパントの飛び蹴りを、折れている箸の左腕で払うJOKER、

目の前にあるのは……ガラ空きの脇腹だけ。 後は

「うわりやあつ！！」

「ツ！？」

紫の炎を纏いし拳はホッパードーパントに着弾、その華奢な身体を殴り飛ばす。

MAXIMUMをまともに受けたホッパー……仰向けに倒れ、殴られた脇腹を抑える

そして、その瞳は……JOKERへの恐怖で溢れていた。

「決めるぜ……」『JOKER!! MAXIMUM DRIVE!!』

「ヒイツ！！

屋上へ逃げようとするホッパー……だが、一歩遅かった。

紫の炎を纏いし、JOKERの右足が背中に着弾した事によってホッパーの身体が爆発、体内からメモリが排出、ブレイクされ、使用者である外人の女の姿に。どうやら、章太郎が破壊しようとしたメモリー一本を回収していた様で傍らにMAXIMUMの余波を受けたのか砕けているメモリが一本。

「また……使つちました

変身を解除した章太郎は、折れた腕を抑えつつ急いで駐車場を後にしてた。

表情は何時も通りの強面であるものの、歯軋りが押さえきれていない悔しかつた、MAXIMUMでしか逆転の道を見出せなかつた事が、だからこそ

「（燃えてくるんだ……ひんやりヒ）」

今日は自宅へ帰り休む事にした章太郎は帰路へ着く 最中に、ふと思い出した。

突然の襲撃と意地もあり使つてはいなかつたがポケットから回収したガイアメモリを取り出す。

「MAGICIAN。手品師か、魔術師か……何れ使つてみるか」

英雄でも悪役でもない少年”左門 章太郎”彼の手に舞い込む一枚目の手札、

”マジシャン”……其の力が明かされる口は、何時であろうつか。

其れは……風都の風にも解らない。

1話の際にドーパント募集を4～5話後と書きましたが、翌々考えると先延ばしにして何の意味があるのか……（苦笑）此処は自分の意見など突っぱね皆さまのアイデアを募集したいと思します。

—
テンプレ

ドーパント名称

身長
体重

特筆すべき能力。

こんな所でしょうか?
では、感想と並び皆さまのドーパント達をお待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6248z/>

若者は英雄になれるか？

2011年12月31日17時54分発行